
あたしの世界

小室 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしの世界

【Nコード】

N8720R

【作者名】

小室 仁

【あらすじ】

模試の当日に高熱を出してしまった主人公。
遅刻した上に、痴漢に遭って落ち込んで、
やけになって蹴飛ばした空き缶が見知らぬ男の子に当たってしまう。
謝りもせず、逃げ出してしまったけれど・・・

熱は38度を上まわっていた。

どうしてこんな日に、熱を出すんだろう。

母親は再婚相手と旅行中だったから、

あたしは今日は家に一人だった。

昨夜服用した風邪薬のせいなのか、

朝、目覚ましが鳴っていたのが分からなかった。

空いている電車の席に座り、熱のせいで朦朧としながらも、

あたしは手の中の単語帳のページをめくり、最後の悪あがきをしている。

日曜の午前10時過ぎ。

もうとつくに模試は開始されていた。

熱に浮かされながらも、せめて英語と数学と国語だけでも受けなければ、

受験料ももったいないしと、自分を奮い立たせて家を出てきていたのだ。

ここ数週間は、勉強に関しては、

自分でも本当に良く頑張ったと思う。

やれることは全てやったし、集中も出来ていた。

後は結果がどう出るか、そんな自己挑戦だけ。
なんとしても、三科目だけでも受けてやる。
熱になんか、負けるか。

「実は、私彼氏が出来たの。今まで黙ってたごめん」
朦朧としているあたしの意識に、ふと声が蘇る。

親友だと思っていた、奈津美の言葉。
他の何でもない友達から聞いた噂話を、
まさか違うよねと笑って確認したら、
そんな答えが返ってきて、あたしは呆れてしまった。
もう三ヶ月も前から付き合っていたとは。

「はは」
鼻で小さく笑って、あたしはもうそれ以上突っ込んで聞かなかった。
三ヶ月も付き合っている彼氏が今更どんな人なのか、
奈津美だって改めて説明したくもないだろうし、
あたしだってもう聞きたくもない。
そんなに重大なことを隠されていたショックは、
もう奈津美とあまり口をきかなくなった今も、
あたしを打ちのめかし続けていた。

勝手に私が親友だと思っていただけで、
奈津美からしてみれば、
私は他の何でもない友達以下ってことだったんだろう。
あたしは頭を振って、奈津美の声を頭から消した。

あたしがあたしを思っているよりも、
他人があたしの事を思ってくれている比重ってのは、
実際は軽い。

そんな事に、最近気づき始めていた。

電車を降りて、がらんとした休日のホームを抜け、
会場の学校へと向かう商店街を、一人とぼとぼと歩く。

平日と違い休みの店が多いせいか、辺りには誰の姿も無かった。

足元がふらつく。

熱のせいで、地面が波打って感じられた。

「すみません」

ふと、声をかけられる。

あたしはツーテンポくらい遅れて、
ぼんやりとその声を振り返った。

中年の白いワイシャツ姿の男が立っている。
銀縁のメガネ、片手で口を覆っている。

あたしはいぶかしげに男の顔を見て、

そしてふと、男のもう片方の手が下のほうで動いているのに気がついて、

男の顔からその手へと、視線を移した。

男は、白いワイシャツの下は何も履いていない。

そして、片手が忙しく自分の下腹部のあたりで上下に動いていた。

朦朧としたまま、あたしはぼーっと、

その動いている手から男の顔に視線を戻す。

あたしの無表情に、男は口元を隠したまま首をかしげ、やがて逃げるように、細い路地に入って歩き去っていった。

あたしの頭の中の回路が繋がったのは、男が立ち去った後。

わなわなと、自分の体が怒りで震えだすのを感じた。

「一体、何なの？」

その場で唸るように呟く。

辛い体を押してテストを受けようと、

精一杯張っていた神経の糸が、ぷつりと切れてしまった。

あたしもその場から小走りに逃げ出しながら、

人のいそうな場所を探した。

小さな公園を見つけると駆け込み、

芝生の上に座り込んで、カバンから携帯電話を取り出す。

再婚相手と旅行中の母親の番号を押した。

ベルは鳴ってはいるけど、何回鳴らしても出る気配は無い。

あたしは、自分の目から涙がこぼれ出すのを感じた。

奈津美の電話番号をメモリから呼び出して、
そして手を止める。

その動きを止めた手が、わなわなと震え始めた。

あたしには誰もいない。

こんな酷い事があったのに。

今、誰かに助けて欲しいのに。

痴漢になんか遭って、情けなかった。

熱が出ていて体も辛かったし、

試験を受けはぐった自分に憤ってもいた。

この辛さを誰にも話せない今が、

とても悲しかった。

あたしは声を上げて泣き出した。

もう、体裁も何も考えられなかった。

どうでも良かった。

模擬テストなんて、一生受けるもんかと、
心の中で毒づいた。

持っていた携帯を投げ捨て、カバンも芝生にぶん投げた。
普段は大人しい方の部類に入るあたしが、
気が狂ったように地団太を踏んだ。

辺りには誰もいなかった。

あたしのいるこの世界には、痴漢とあたししかいないんだろうか。
そんな気違いじみたことを、真剣に考えたりした。

あたしは、近くに捨てられていた空き缶を、
狂気に任せて、思い切り蹴飛ばした。

「痛っ！」

少し離れた場所で声がする。

あたしはびくりと動きを止めた。

やがて、むっくりと灌木の陰から人が起き上がる。
どうやらここから見えないその場所に、人が寝てでもいたんだろうか。

あたしが蹴った空き缶が当たったらしい。

模試を受けようとしていたあたしと同じように、
休日なのに高校の制服姿。

隣町の男子校の学ランだった。
体の大きい綺麗な顔をした男の子だ。

缶が当たった痛みのせいか、

あたしを振り返ったその顔は怒りに燃えていた。

でも、風邪の熱と痴漢に遭った怒りのせいで真っ赤になった頬を、
涙でべしよべしよに濡らして、泣いているあたしを見ると、

彼はぎよっとしたように表情を緩めた。

自分が蹴った缶がぶつかったのだから、

謝らなきゃいけないのは、重々分かっていた。

でも、その時のあたしは、

まるで八つ当たりするかのように、その男の子を睨み付け、
投げ捨てた携帯とカバンを拾って、その場から走り去ったのだった。

模試など、もちろんばっくれて、

家に帰り寝た。一晩、そのまま寝てしまった。

次の朝、母親と無事連絡が取れて、

昨日の可哀想な自分の出来事を、

演出120パーセントで母親に愚痴り、

十分に慰めてもらうと、少し元気が出た。

少なくともあたしの世界には、
痴漢とあたしの他に、母親もいるのだと思った。

熱もだいぶ下がったので、学校に行く準備をしていて、
重大な事に気がついて、あたしは愕然とした。

財布がない。

落としたとしたら、あの時しか考えられない。

蹴った缶が当たって、あたしを怒りの顔で見ていた男の子の顔が蘇
る。

あたしは早めに家を出て、その公園まで急いだ。

電車から降りて、改札から走って出て昨日の公園に向かう。
あの芝生の辺りを一生懸命探したけれど、
やはり財布は落ちていなかった。

謝らないあたしに腹を立てて、あの男の子が盗ったのかな。
大した金額は入ってなかったけれど、
好きなデザインだったから、
惜しかった。

赤い花のモチーフの財布。
しょうがない。自業自得だ。

あたしはため息混じりに、学校に登校した。

「おはよう！」

奈津美は相変わらず、あっけらかんとあたしに接してくる。
でも、あたしはあれ以来、

奈津美とは、挨拶も頷く程度で目も合わさなかった。

今朝も同じ。

目の端に、少しがっかりした奈津美の表情。

いいじゃない、あなたの世界にはあたしなんかがいなくなたって、
三ヶ月も付き合っている彼氏がいるでしょう？

自嘲的に、心の中で呟いてみる。

口に出して言わなくても、言葉っていうものは、
思うだけでも、心を傷つける力を持っている。

口をきかなくなったといえ、

決してあたしは、奈津美のことを嫌いではないから、

あたしの言葉のせいで傷つくのは、

あたしの心だけで勘弁してあげた。

いつものように、あたしは淡々と一日を過ごし、
放課後、校舎を出て校門に向かうと、

ちょっとした騒ぎが起きているのに気がついた。

「隣の男子校のN高の子が、誰か待ってるらしいわよ」

「やだー、うち女子高なのに、

校門でなんて大胆な待ち合わせ！」

「ちょっと、かなりカッコいい子じゃない？」

「羨ましい！」

黄色い歓声が上がっている。

女子高に通っているというのに、

こういう黄色い女の声は、あたしは慣れなくて嫌いだった。

その黄色い声を追い越そうと、早足になって校門を出る。

「ちょっと、あんた」

ふと声がして、あたしはちらりとそちらを見た。

学校の校門の脇に、

隣の男子校の学ランを着ている、背の高い男の子の姿。

他にも下校中のうちの生徒がたくさんいたから、

他人事だろうと思って歩き続けたら、

後ろから手を掴まれた。

昨日の痴漢のことがあったから、あたしは思い切り悲鳴を上げて、その手を振り切る。

「ちょっと、落ち着けよ」

振り切られた手を肩の上に上げて、その男の子はあたしを見た。少し長めの髪を耳にかけている。黒目がちの切れ長な瞳、通った鼻筋、広い唇。

この綺麗な顔、どこかで見たことがあると思った瞬間、目の前に財布を差し出された。

赤い花のモチーフの財布。あたしのだ。

「これ、あんたのでしょう？」

男の子はそう言って、財布を差し出す。

あたしは呆気に取られて、

「はい」

とだけ頷いた。

「そう、じゃあ良かった」

あたしの手には財布を押しつけて、その男の子はあたしに背を向ける。

盗ったんじゃないかったの？

固まって彼を見ていると、

彼は早足で歩き去りだした。

やばい。

このままでは、あたしという人間の倫理的な存続がやばい。

倫理的存続の危機の理由、その1。

昨日、あたしはやけになって蹴飛ばした空き缶を彼にぶつけたのに、謝るところか、彼を睨み付けてその場を逃げた。

その2。

こんな風に財布を拾ってくれて、わざわざ届けてくれるようないい人を、

自分の勝手な思い込みで心の中でだけとはいえ、盗人扱いした。

その3。

そして今、またあたしは、

財布を届けてくれたお礼も言っていないままだ。

自分を好きになる積極的な理由なんて、

生まれてからこの方、一度も探したことなんてなかったけれど、そしてそれでもいいやと思ってきたけれど。

でも、人として、最低な自分はどうにもこうにも許せない。

あたしは咄嗟に、去って行こうとするその男の子の背中を、ダッシュで追いかけた。

そして思い切りつまづいて、なんと彼の背中にダイブしてしまう。

あたしの顔面が思い切り彼の背中を打ち、驚いて振り向いた彼ごと、あたし達は転んでしまった。

下校時の、女子高の校門前。
人だかりが出来る。

情けなくて、恥ずかしくて、
どうしようもなかったけれど、
あたしは必死になった。

「お詫び、お礼、たくさんあります！」
カタコトしか話せない外人みたいな言葉を、
必死に口から押し出した。

そして、あたしは転んだまま彼の顔を見る。
突き転ばされた彼は仰向けになって、あたしにのしかかれながら、
あたしの顔を見て、なんとあろうことか小さく噴出した。

「鼻血出てる」
指であたしの顔を指す。

慌てて鼻の下に手を当てると、ぬるりとした感触がした。
見ると、指についた赤い血。
彼の背中に鼻を打ったんだろう。

彼は冷静に立ち上がり、あたしの手を引いてあたしも立ち上がらせた。

そしてポケットからハンドタオルを出して、

「これ、使えば」

あたしに差し出す。

何も言えずに鼻血をたらし続けるあたしに、

「いいから」

彼はハンドタオルを押し付けた。

あたしは頭を小さく下げて、素直にタオルを受け取り、鼻に当てる。

「お礼、またひとつ増えました」

タオルにつく自分の血の赤を見ながら、

あたしは、消え入りそうに言う。

「別に礼をしてもらおうと思って、来たわけじゃないから。

学校の制服も知ってたし、財布落として困ってるって分かってるのに、

知らん振りするのは、俺が自分で気持ち悪かったただけだし。

そのタオルもやるよ」

じゃ、と言ってまた去ろうとする彼の手を、

あたしは反射的につかんだ。

「このままじゃ」

倫理的に自分を許せません、

なんていう他の人にとっては訳の分からない言い訳も出来ず、

あたしは涙目になる。

ぼろぼろと涙があふれ出て来た。

「別れられません！」

まるで幼稚園児がダダをこねて泣いているようなだみ声で、

あたしは彼の腕をつかんで言った。

辺りの野次馬から、

何やら歓声のような声が上がったのは気のせいだろうか。

彼は驚いて振り向いた。

そして、即座に爆笑する。

「笑って悪いけど、あんたのその顔もの凄いよ」

彼の言う事は、テンパっているあたしの耳には届かない。

「お願いです、どうか。お茶だけでも！」

繰り返し、すがりつくあたしに彼はのけぞる。

「いないよ、別に」

「そんな事を言わずに、どうかどうか」

鼻血と涙を流しつつ、あたしはすがり続ける。

「分かった、分かったから」

彼はとうとう折れた。

「じゃあ、腹が減ってるから牛丼でもおごってよ」

あたしはその彼の言葉を聞くと、涙と鼻血を流しながら、

でもにんまりと一生懸命、笑顔になってみせた。

後から思えば、きっと恐ろしい形相だったろう。

ふと、あたしの名前を呼ぶ声がして振り返る。

「彼氏？」

そこには奈津美の姿があった。

「後でどんな人なのか、詳しく教えてね」

奈津美はこそつと言うと、事情は理解しているというような、

笑顔を浮かべて走り去った。

「彼氏なんかじゃないけど」

あたしは呟く。

でも、もしこの彼があたしの彼氏だとして、
ずっと奈津美に隠していたとしても、
奈津美は怒らないの？

あたしは急に、自分自身がとても子供っぽく感じた。
がつくりと、肩が落ちる。

「ねえ、あんた。もう行かない？」
ふと、彼があたしに声をかけてくる。

「絶対、周りにいるやつら、
俺とあんたが別れ話の修羅場だって勘違いしてるよ」
苦笑して言った。

「このままじゃ、別れられないとか、あんた叫んでたし」
あたしはハッと辺りを見回して、慌てた。
「すみません！！行きましょう！」
あたしが言うのと、彼は苦笑したまま、
それでもあたしと一緒に歩き出してくれた。

迷惑をかけたのに助けてもらって、
その上、恥をかかせてしまった。

これからどれだけ、この彼に謝ったり、
お礼を言ったりしなければならいんだろう。
せめて、牛丼30杯くらいはご馳走するくらいの気持ちで、
謝らなければと、あたしは自分に誓っていた。

痴漢とあたしと母親だけしか存在しなかった、
あたしの世界に、

この瞬間から、30杯の牛丼が存在し始めた。

まだまだ、あたしの世界は捨てたもんじゃないのかもしれない。
鼻血と涙を彼にもらったタオルでふき取りながら、
彼と牛丼屋へ向かうあたしの足取りは、結構軽かった。

今夜、奈津美に電話してみよう。
あたしは思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8720r/>

あたしの世界

2011年4月4日21時37分発行